

Title	退任者のあとがき：謝意と研究の軌跡
Sub Title	Acknowledgements
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No. 特別号-II (1991. 3) ,p.261- 262
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	矢内原勝教授退任記念論文集：国際経済：課題・理論・体制
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19910301-0261">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19910301-0261</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 退任者のあとがき

——謝意と研究の軌跡——

通常、退任記念論文集には、退任者の個人史が巻頭に載せられているが、私は論文（調査報告）を寄稿したので、巻末に謝辞と私のこれまでの研究の道程を記すことを許していただきたい。

まず私のようなものに対して記念論文集を刊行して下さった編集者および論文寄稿者に対して、心からの謝意を表したい。

つい昨日のことのようには思えるが、私が山本登名誉教授（当時助教授）の研究会に入れていただいたのは1948年4月である。私の卒業論文は「世界経済学方法論について」、「理想社会としての共産主義社会」、「資本主義自生とその倫理的条件」の三部作で、題名からでもおもしろくない内容が想像できる。これが三部作である理由は、私が長い論文を書けなかったことにもよるが、当時フランス語で読んだフローベールの *Trois Contes* を真似したということもある。学生時代の私は語学マニアであって、第一外国語は英語、第二外国語はドイツ語であったが、慶應外国語学校でドイツ語、フランス語、ロシア語を習い、さらにアテネ・フランセでラテン語を、独学でギリシア語を学んだ。二つの古典語はあっという間に忘れ、ロシア語はプーシキンの『駅長』も読んだのであるが、これもほとんど忘れ、ドイツ語すらもいまはおぼつかない。かろうじて残っているのはイギリス語とフランス語だけで、語学のためにおびただしい時間を空費してしまった。

山本先生の寛大な御指導のもとに、学生時代は帝国主義論、大塚史学など、卒業後は旧植民地すなわち発展（開発）途上国の経済とその開発理論を研究することになる。1954年にブリティッシュ・カウンシルの奨学生の選抜試験を受けるにあたり、私の選んだ主題は、英連邦の統一である。幸い試験に通り、船でロンドンまで行ったが、途中那覇（当時アメリカの管理下）、ホンコン（オランダ船よりイギリス船に乗換える）、シンガポール、ベナン、ボンベイ、コロombo、ポートサイド、スエズを経由する行路は、かつて西洋人が東洋にやってきたものの逆コースで、初めて異国に触れる私にとっては貴重な経験であった。

London School of Economics and Political Science (LSE) の大学院では、英連邦統一の経済的側面としてスターリング地域機構を調べた。この主題を選べば、こと英語文献に関するかぎり、LSE と英連邦研究所 (Institute of Commonwealth Studies) の図書目録を検索して、関連文献は全部読めるのではないかと思った。（今日では研究主題を狭い範囲に特定化しても、関連研究が多すぎて、自分が読むべきものをいかに選定するかが勝負である）当時のスターリング地域の最も重要な機構であったドル・プールに対する純寄与者は、ゴムとスズの輸出によるマレーシアと、ココア豆、落花生、ヤシ油・核の輸出によるゴールド・コースト（現ガーナ）とナイジェリアであった。それで私は奨学金が切れてすぐ、1955年12月30日にロンドンを発ち、シェーベルトではないが1か月ヨーロッパ大陸

冬の旅をしたのち、ローマを飛行機で発ち、いきなり乾季のナイジェリアとゴールド・コーストの1か月にわたる夏の旅をすることになった。1956年2月23日にゴールド・コーストのタコラディ港で日本の貨物船に乗船し、大阪港に着いたのは同年4月18日であった。その後何度もアフリカに行ったが、この最初の西アフリカの一人旅の印象は私にとっていまでも鮮明である。

開発経済学者としての私にとって、研究対象国はどこであってもよいのであるが、ラテン・アメリカは行ったことがなく、アジア諸国と中近東と北アフリカにはいくらかの経験があるが、サハラ以南アフリカ経済の研究者が少なかったことにより、私はややサハラ以南アフリカ経済の専門家というラベルを貼られた感がある。NHKの「世界・くらしの旅」の講座にしても私の担当は最近ではアフリカだけである。

私の開発経済学の先輩たちは山本先生をはじめアジア経済専門家が大部分で、また経済学の理論分析用具を適用する点では不十分の感があったので、私は現状のたんなる記述ではなく、理論分析用具を対象地域に適用することに私の学問上の比較優位があるのではないかと思った。私は理論はきらいではないが、下手の横好きの感もある。国際貿易理論と開発経済学理論のために私が費したおびただしい時間を思うと、語学に費した時間と同様に、ここでも私は時間を空費したのかもしれない。理論の勉強にあてた時間を、発展途上国の実態の研究にあてたほうがよかったのかもしれない。

しかしながら、済んでしまったことについて、あれこれ考えてもしかたがない。とりあえずは文部省の予算がとれているので、来年度(平成3年度)もサハラ以南アフリカの調査に行くことになる。そんなわけで慶應は退職しても、いましばらくは研究の場からは消えないつもりである。

1990年11月

矢内原 勝